

中学校における選択履修の幅の拡大に対応する指導の在り方

飯 田 精 一*

I はじめに

学習指導要領における教育課程編成の基本的な理念をうけて、中学校では、中学校教育を中等教育の前期としてとらえ直し、中・高一貫のもとで、「選択履修の幅の拡大」、とりわけ選択教科(教科間選択)に充てる時数の確保と多様な選択教科の開設が大きな課題になっている。

資料1のように、中学校第1、2学年では、外国語を含めて1以上、第3学年では、外国語を含めて2以上の選択教科を履修させるとした。そして、選択教科の種類も第2学年においては従前の選択教科に音楽、美術、保健体育および技術・家庭を加えた。第3学年においては、従前の選択教科に国語、社会、数学及び理科を加え、すべての教科を選択教科として設け得ることになったのである。

しかし、その実態は、生徒が教科を自由に選ぶだけのメニューがそろっているとはいえない。文部省の教育課程編成状況調査によると、中学校3年で2つ以上の選択教科を履修することになっているが、全国の中学校の約2割では、もともとの選択教科である外国語の他に選択教科が1つしか用意されていないのである。

そこで、「選択履修の幅の拡大」に対応する指導の在り方を、特に必修教科と選択教科の違いに着目しながら考察したい。

II いまなぜ選択履修の幅の拡大なのか

1 その背景

中学校教育には、人々が生涯学習社会を生き抜いていくための基盤を培うという視点に立った教育が求められている。これからの変化の厳しい社会において、生涯を通して学習への自信や喜び、生きがいをもって学び続け、たくましく生きてい

資料1

中学校の各学年における必修教科、道徳及び特別活動のそれぞれの授業時数と各学年における選択教科等に充てる授業時数並びに各学年における総授業時数

| 区分 | 必修教科の授業時数 | | | | | | | | 道徳の授業時数 | 特別活動の授業時数 | 選択教科等に充てる授業時数 | 総授業時数 |
|------|-----------------|-----------------|-----|-----|----------------|----------------|------|---------------|---------|---------------|-----------------|-------|
| | 国語 | 社会 | 数学 | 理科 | 音楽 | 美術 | 保健体育 | 技術・家庭 | | | | |
| 第1学年 | 175 | 140 | 105 | 105 | 70 | 70 | 105 | 70 | 35 | 35 ~ 70 | 105 ~ 140 | 1,050 |
| 第2学年 | 140 | 140 | 140 | 105 | 35 ~ 70 | 35 ~ 70 | 105 | 70 | 35 | 35 ~ 70 | 105 ~ 210 | 1,050 |
| 第3学年 | 140 ~ 105 | 140 ~ 104 | 105 | 35 | 35 ~ 140 | 70 ~ 105 | 35 | 35 ~ 70 | 35 | 35 ~ 70 | 140 ~ 280 | 1,050 |

(選択教科の種類) [旧] [新]

| 第1・2学年 | 第3学年 | 第1学年 | 第2学年 | 第3学年 |
|---------------------|--|---------------------|--|--|
| ○外国語 ○その他特に必要な教科 | ○音楽 ○美術 ○保健体育 ○技術・家庭 ○外国語 ○その他特に必要な教科 | ○外国語 ○その他特に必要な教科 | ○音楽 ○美術 ○保健体育 ○技術・家庭 ○外国語 ○その他特に必要な教科 | ○国語 ○社会 ○数学 ○理科 ○音楽 ○美術 ○保健体育 ○技術・家庭 ○外国語 ○その他特に必要な教科 |
| | | | | |

* 下線は、選択教科として新たに加えられた教科である。「その他特に必要な教科」として職業、工業、家庭、農業、商業、栽培等のほか、郷土史、書写科、国際科等の例が見られる。

くためには、その基盤となる「新しい学力観」すなわち、「自ら学ぶ意欲と社会の変化に主体的に対応できる能力」を身につけることが大切である。

また、個性を生かすためには、生徒一人一人が自分のものの見方・考え方をもち、内発的な意欲や主体的な態度を育成することが大切である。そして、そのためには、特に、思考力、判断力、表現力などの能力の育成を図るとともに、自ら学ぶ意欲や主体的な学習の仕方を身に付けさせることが必要である。

* 札幌市教育委員会 指導主事

このようにして、「選択履修の幅の拡大」は、「生涯学習の基礎を培うこと」や「新しい学力観」と密接に結び付きながら「個性を生かす教育」の具体的な方略となっているのである。

2 その意義

そもそも選択履修の幅の拡大は、中学校段階が、小学校段階と比べ個性の多様化が一層進むことを踏まえて、一人一人の生徒の特性等に応じた「個性を生かす教育」を充実していくという考え方方に立って行われたものである。

1970年前後より、国際的にも人間性豊かな教育を求める「教育の人間化」が提唱されるようになり、学習における人間（学習者）の主体化が重要な課題となってきた。そのためには、「……一人一人の学習者に現在よりもはるかに多様な学習選択の余地を与えなければならない」（1971年11月のユネスコ総会・『フォール報告書』）と言われるように、学習者の様々な要望を満たすような学習を「選択」できる機会が用意されていなければならないのである。

3 その内容

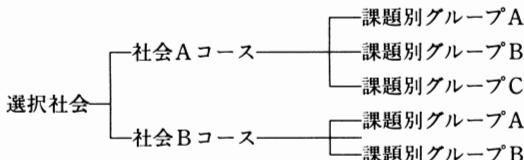
選択履修の幅の拡大の内容として次の三つが考えられる。



(1)教科内選択学習

学習内容、学習方法等を学習コースとして設定し、生徒一人一人が意欲を持って学習に取り組めるようにしたものである。例えば、社会科地理的分野における「地球儀や世界地図を使っていろいろな国を調べよう」という授業では、①日本より面積の大きい国、②島国、③内陸にある国、④赤道近くに位置する国、⑤名前に特徴のある国等を調べてみようという選択課題を設定して、生徒が

資料2 選択教科内の選択学習（社会科）



自分の好みのコースを選び学習できるようにする。さらに、学習内容の補充（不足したものを補うこと）を図ったり、深化（一層深めて取り扱うこと）するためのコースや応用・発展的なコース等での学習も考えられる。

(2)教科間選択学習

ある教科を生徒自ら選択し、その教科の力を伸ばすようにしたものである。これには、①教科によって、学習内容の習熟の程度に応じ、個別学習やグループ別学習等学習集団を弾力的に編成する方法、②生徒に選択履修させる内容としてメニューを数多く用意し、生徒が自分の興味・関心に応じて選ぶ方法等が考えられる。この中には、資料2のように、選択教科内の選択学習も考えられるので注意する必要がある。

(3)総合学習

教科の枠にとらわれない課題選択学習のことである。生徒が、自然・社会・文化にかかる現代社会の課題を総合的な視野から追究し、人間の在り方について自らの考えをまとめていくような学習、身近な地域を調べ教材をつくる学習等が考えられる。この学習は、教科間選択学習の延長上に設定しなければ、「はいまわる経験主義」に陥る危険性があるので、明確な目標と系統性のある学習指導計画が必要である。

さて、ここでは今最も話題となっている教科間選択学習（以下「選択教科の学習」と呼ぶことにする）に焦点を当て、必修教科の学習との相違点や、選択教科の学習の実践例をもとにその指導の在り方を述べる。

III 選択教科の学習

1 その内容

選択教科の学習は、生徒自身の選択により、生徒一人一人の特性等に応じた多様な学習活動の展開をめざすものである。

しかし、選択教科の学習は単にコースを開設し、生徒に選択させるだけでなく、いかに生徒の学習課題に対応できるかにかかっている。生徒一人一人の学習課題に対応することは大変な作業であり、その基本となる自らの学習課題をつかむという能動的な選択能力の育成も図らなければならない。

通常の必修教科の学習とはひと味ちがった内容・

方法で学習課題を学ぶことができるような授業実践が求められている。そのためには各学校で生徒の実態を把握し、指導と評価の一体化を意識した多様な授業論に立った教育課程の編成を進めることが必要である。

選択教科の内容としては、各教科で多様な学習の展開が考えられるが、共通しているのは、次の3点に集約できる。

- (1)生徒の特性に応じ、多様な学習活動が展開できることにする。
- (2)各教科の内容に示されたものを基本とすること。
- (3)各教科の目標にそって、課題学習、自由研究的な学習、作業的な学習、体験的な学習、総合的な学習、見学・調査・観察・実験など各学校の創意工夫を生かした多様な学習活動を展開すること。

2 必修教科の学習との相違点

右上の表は、選択教科の学習の特色をつかむために、必修教科の学習との相違点を強調して、対比的にとらえたものである。

選択教科の学習における大きな特色は、次の3点に集約できる。

- (1)学習の内容や方法について、学校選択でなく、生徒選択によるということ。

特に最近の研究成果によると、自己決定(生徒自らが学習課題を選択すること)は、内発的動機づけの中でも最も重要な要因の一つであると言われている。

- (2)必修教科の学習よりも生徒一人一人の能力・適性、興味・関心に柔軟に対応しようとしていること。

- (3)必修教科の学習よりも発展的、応用的な学習活動を展開しやすいこと。

しかし、以上のことから選択教科の学習が必修教科の学習よりも優越しているというような意味にとてはならない。なぜならば、必修教科の学習においても、一斉指導における個別化、体験的活動、チーム・ティーチング、図書館利用など教科の内容を一層定着させるため、各分野の内容について補充や深化を行うなど、これまでより柔軟な指導は当然求められるからである。しかも、前述のように、必修教科の学習においても教科内

選択学習は可能となったので、各学校が学校の実情等に応じ、選択教科の学習と必修教科の学習の特色を生かし、創意工夫をして教育課程を編成することが重要である。

表1 必修教科の学習と選択教科の学習の相違点

| | 学習内容と方法 | 選択幅 | 学習の評価 | 場所 |
|-----------------------------------|--|--|-----------------------------------|--|
| 選択教科 ↑ 教科内選択学習 ↑ 必修教科 | 能力・適性、興味・関心等に応じた発展的な内容と方法 より自由な内容と方法 基礎・基本的内容と方法 | 焦点化された中からの生徒選択 一定の枠内からの選択 ほとんどない | 個々の学習活動を生かす評価 学習内容を中心とした教科 | スタジオ 多目的教室 図書館 博物館 図書館 普通教室 |

3 実践例

ここでは、「地域性を生かした教育」として大きな有効性があると考えられる「身近な地域」の学習において、資料3の必修教科社会の学習と対比しながら、資料4の選択教科社会の学習の意義と内容について述べる。

資料3 必修教科社会における「身近な地域」の学習目標と学習計画

I 身近な地域(10時間)の学習における目標

- (1)「あいの里」を含む拓北地区の観察・調査を通して、地理的な見方・考え方の基礎を身につけよう。
- (2)「あいの里」を含む拓北地区の特色や変化を理解し、地域への理解と関心を深めよう。
- (3)縮尺の大きな地図の取扱いに慣れ、親しみ、地図の読み方を理解しよう。

II 学習内容の全体計画

| 時間 | 主題 | 学習内容 |
|------|----------------------|--|
| 1 | 地形図との出会い | 1 地形図と親しむ 2 仙台市と札幌市の共通点と相違点 |
| 2 | 地形図の読み方 | 1 地図利用の必要性 2 地図の約束 ア縮尺 イ等高線 ウ方位 エ地図記号 |
| 3 | 地形図と作業(1) | 1 地形断面図 2 段彩図 3 三角州、扇状地、河岸段丘と土地利用 |
| 4 | 地形図と作業(2) 野外観察の準備 | 1 古い地形図と新しい地形図 2 地形図による問題の発見 1 目的 2 ルートマップ 3 観察の視点 |
| 5~6 | 野外観察の実施 | 1 観察…地形図と実際との照合 2 記録 |
| 7 | 基礎的学習の評価 | 1 ~ 6 時までの評価 |
| 7 | 課題分けと調査の計画 | 1 自然 2 農業 3 産業と開発 4 生活 5 その他 |
| | 課題別調査の実施 | 1 調査 2 記録 (夏休み中の課題) |
| 8 | 野外観察や調査のまとめと報告への準備 | 1 野外観察や調査の結果についての話合い 2 報告の分担 3 報告書の作成 |
| 9~10 | 野外観察と調査の報告と討論 | 1 地域の変化、特色と将来の展望 2 他地域との結びつき 3 自己評価 |

(平成3年度)

資料4 選択教科社会における年間学習計画

| 月 | 日 | 曜 | 授業内容 | 場所 | 備考欄 |
|----|----|---|--|-----------------------|------------|
| 4 | 26 | 金 | オリエンテーション（学習内容や計画についての話し合い）役員の選出 ①社会科学の研究の方法とフィールドワークのすすめ（講演：教育大学助教授 君尹彦先生） | 学習センター 以下、 〔学セ〕 | |
| 5 | 10 | 金 | ②講演の感想をまとめる。あいの里フィールドワーク下見（地域の概要を確認しよう） | 屋外 | 徒歩 |
| 5 | 17 | 金 | ③あいの里についての学習と聞き取り項目の準備 | 学セ | |
| 5 | 24 | 金 | ④住宅都市整備公団太田清澄さんの講演会と質疑応答 | 学セ | |
| 5 | 30 | 金 | ⑤講演会の反省とまとめ | 学セ | |
| 6 | 7 | 金 | ⑥篠路農協への聞き取り調査（農協参事からの概要説明と質疑応答、アスパラの選定出荷場見学） 篠路コミュニティーセンター見学、篠路歌舞伎の歴史などの説明 | 篠路農協 | 大学の バスで |
| 6 | 14 | 金 | ⑦講演会・篠路農協の聞き取り調査まとめ | 学セ | |
| 6 | 21 | 金 | ⑧夏休み中の聞き取り調査の準備 * 4校時租税教室（学年一齊社会科） 北税務署統括国税調査員（大館政男さん）の講演と質疑応答 | 学セ | |
| 6 | 28 | 金 | ⑨夏休み中の聞き取り調査の準備 計画表の中間発表（第1次） | 学セ | |
| 7 | 19 | 金 | ⑩計画表の中間発表（第2次） | 学セ | |
| 9 | 6 | 金 | ⑪夏休み中の聞き取り調査のまとめと発表会準備 | 学セ | |
| 9 | 27 | 金 | ⑫夏休み中の聞き取り調査の中間発表会 | 学セ | |
| 10 | 11 | 金 | ⑬発表内容のまとめ(1), 印刷・製本の準備と反省 | 学セ | |
| 10 | 18 | 金 | ⑭発表内容のまとめ(2) | 学セ | |
| 10 | 23 | 水 | ⑮「フィールドワークから学ぶ」（夏休みの聞き取り調査の発表と討論会） | 学セ | |

計28時間（平成3年度）

地域の教材化を図ったり、教室を出て地域で実際に体験して学んだりすると、生徒は、新たな興味と関心をもち、様々な発見もできる。ちなみに新学習指導要領では、「身近な地域」の学習のねらいや内容の趣旨は、従来通りとなっているが、「身近な地域」の学習には、直接的な観察、調査などの学習を通して、身近な地域それ自体の地域的特色を理解させること（目的概念）や地理的な見方・考え方の基礎を養うこと（方法概念）の二つのねらいが含まれている。

「観察や調査」の指導に当たっては、生徒の特性等に配慮し、地域の特色を具体的に表している場所や事象を適切に選択し、明確な年間指導計画に位置づけることが大切である。

(1)選択教科の学習目標

選択教科の学習であっても、明確な指導目標がなければならない。目標のない学習はあり得ないし、生徒の変容ぶりを評価することもできない。

選択教科社会科における「身近な地域」の学習目標は、必修教科の学習ではなかなか得られない、次のような特色がある。

①十分時間をかけて自分たちの生活の舞台とし

ての「身近な地域」を見つめ直すことができる。また、身近にある博物館、郷土資料館、史跡等を見学したり、調査したり、具体的な教材を通してわかりやすい学習を展開することができる。

②総合的分野から地域の変容をとらえることができること。また、学校が、「地域の学校」と変容できる可能性を示すことにもつながる。

③先人や地域に詳しい人の話を実際に聴くことができること。このことを通して、「感謝の心や公共のために尽くす心を育てる」ということもできる。

④学習意欲の向上を図ることができること。すなわち、自分自身を知り、よさを発見し、学ぶことの楽しさと成就感を体得することができる。また、自ら学ぶ意欲を育てるための体験的な学習や問題解決的な学習を重視した展開ができる。

⑤自ら課題を見つけ、多様な学習の目標・方法・内容を選択できること。

「身近な地域」の学習を通して、思考力、判断力、表現力などの能力の育成を図り、自ら

学ぶ意欲や主体的な学習の仕方を身に付けることができる。

まとめて言うならば、中学校社会科の三分野にわたる学習、自由研究的な学習、見学・調査などを含む総合的な学習や、生徒の特性等に応じた多様な学習活動を展開できるのである。また、必修教科で伸ばしてきた生徒の思考力、判断力、表現力などを興味・関心に応じてさらに伸ばすことができるるのである。

(2)選択教科の学習展開の工夫

選択教科の学習展開にあたっては、次のような点を工夫するべきである。

①生徒各自が学習目標・方法・内容を含む学習計画を作ること。

②生徒各自が学習成果をレポート、TPシート、ビデオなどにまとめること。

③学習の成果をひろめる中間発表会や最終発表会の機会を作ること。

選択教科の学習展開においては、教師は生徒に

とって、よりよき学習の支援者としての役割を期待される。

(3)評価の在り方

選択教科の評価に当たっては、選択教科の学習目標に沿って、自己評価、教師による評価、資料5のような生徒相互による評価等を取り入れながら、客觀性を高めていくことが望まれる。生徒の学習への関心・意欲がさらに増し、学習への自信や喜び、生きがいをもてるようなプラス面での評価が必要である。また、評価の観点としては、①目標の設定、②学習の工夫、③協力関係、④学習の成果等が考えられる。

IV 選択履修の幅の拡大に対応する教育課程編成の工夫

各学校で、選択履修の幅の拡大に対応する教育課程を編成する場合の工夫としては、次の5点が必要であると考えられる。

1 学校の教育目標の設定と関連性を図り、各学

資料5 選択教科社会における自由研究テーマと相互評価（A子さんの場合）

| 番 | 研究テーマ・(人數) | 良かった点、改善すべき点 | 感想・その他 |
|---|--|---|--|
| 1 | BEER 何で札幌はビールが有名なんだ？(工場見学含む)(2) | ・疑問点についてていねいに調べている。 ・写真などを使って詳しく説明している。 | ・見学をして細かいところまでよくまとめて説明してくれたのでよくわかった。 |
| 2 | 保健所伝(4) | ・ポイントをしぶった説明をするともっと良くなる。 ・図をうまく使って説明していた。 | ・とても詳しく説明してあるがむずかしいところがある。 |
| 3 | 屯田兵について(5) | ・説明は大変分かりやすかった。 ・ビデオの画像には見づらいところがある。 | ・ビデオと説明をうまく合わせることはむずかしいと思った。 |
| 4 | 札幌少年鑑別所(2) | ・実際に行っているので説明に迫力があった。 ・写真やOHPなどを使って説明するとさらによい。 | ・全く知らなかった鑑別所のことがたくさんわかった。 |
| 5 | あいの里を知っていますか(100人にアンケート)結果を集計し住宅都市整備公団の太田清澄さんに感想を聞く(2) | ・内容がおもしろい。アイデアがよい。 ・アンケートをしただけでなく結果についても講評をもらっているところがよい。 | ・身近な「あいの里」がいろいろな人にどう思われているのかがわかった。 ・おもしろい研究だと思う。 |
| 6 | 篠路のアスパラガス栽培(1) | ・一人だけでたくさんのこと調べたのはすごい。 ・表やグラフを上手に使っていた。 | ・まとめ方がわかりやすく多くの知識を得ることができた。 |
| 7 | あいの里における交通量調査(3) | ・自分たちで自動車の台数を数え困難な調査をやりとげていた。調査を比較して特色をつかんでいた。 | ・交通量調査だけでもすごいのに比較し考察しているところがまたすごい。 |
| 8 | MY TOWNあいの里(イメージビデオの製作・吉成数也さんへの聞き取り調査を含む)(6) | ・ビデオ製作にいろいろな工夫がされている。 ・現在だけでなく未来のことまで予測しているところがよい。たくさんのことを考えている。 | ・素晴らしい研究発表だった。ビデオづくりが上手でおもしろい。いろいろな資料がわかりやすく説明されていた。 |
| 9 | 老人保健施設 茨戸アカシアハイツを訪ねて(3) | ・写真などを上手に使ってまとめている。 ・たくさんの疑問に対して細かく調べている。 ・ビデオも上手に使っている。 | ・高齢化社会でもやっていけるという希望が見えてくる研究である。現在の問題を「あいの里」と結びつけている。 |

* 4, 8, 9 番の研究テーマについては、教師が事前に関係者との了解を得てから生徒が聞き取り調査を行った。

校が創意工夫を生かして生徒の特性や地域環境の特性等に応じた多様な学習活動を工夫すること。

2 必修教科と選択教科の特色を生かし、効果的な学習が行われるように教科相互の関連を図ること。個々の教科でも必修の部分で行う学習内容と選択で行う内容及び時数の関係を十分検討する必要がある。また、必修教科で上限の時数で行う場合、学習指導要領の内容を補充・深化すること。

3 選択履修の幅の拡大の意義、選択履修の仕組みなどについて教職員が十分共通理解を図り、生徒や保護者への説明会を実施すること。

4 生徒の選択能力の向上が、日常の指導、例えば、教科内選択、クラブ活動及び委員会活動の選択等の場面を通して図れるようにすること。

5 学校や地域の物的・人的資源を活用すること。教師が、教室の外にもさまざまな貴重な教育資源が豊富に存在することに気付くことが大切である。

V おわりに

「選択履修の幅の拡大」に対応する指導の在り方を考察してきた。最後に特に主張したかったことを次の5点にまとめてみた。

1 教科の枠にとらわれない総合学習において、特に「身近な地域」の学習は魅力的な学習になるはずである。

2 選択教科が万能であるという考えは危険である。必修教科で伸ばしてきた生徒の能力・適性、興味・関心等が選択教科では、さらに伸ばせるというように考えるべきである。

3 選択教科の学習などで、老人医療施設等を訪問することは、生徒の将来の姿やボランティア活動を考える貴重な体験となる。

4 「環境教育」「消費者教育」「国際理解教育」など、今後は、教科の枠にとらわれない総合学習の考え方が重要になってくる。

5 必修教科でも、生徒の能力・特性、興味・関心等に応じた教育が充実するように多様な内容を用意して、自己選択能力を育成し、選択履修の幅の拡大につながるように「個」の成長発達過程に応じた工夫が求められる。

これからは、「選択履修の幅の拡大」に対応する指導の在り方を大きく改善していかなければならぬ。

また、小学校、中学校、高等学校と教育課程の見通しをもたなければならない。そのためには、これまで以上に学校や教師の創意工夫を加えた多様な教育課程の編成が必要である。

参考文献

- ・中学校指導書 教育課程一般編 平成元年7月 文部省
- ・中学校教育課程における「選択履修幅の拡大」の実施 平成4年4月 教育調査研究所

資料

- ・資料1、2は、「中学校教育課程一般指導資料～教育課程の編成と学習指導の工夫～」(平成3年5月 文部省)より引用。
- ・資料3、4、5は、執筆者の北海道教育大学附属札幌中学校に在職中の実践によるものである。